

放射線科学

学会雑感あれこれ

金子 昌生

一般に学会に行ってくると云うと、我々医学者仲間では当然医学会のことを思い込んでいるが、世の中では創価学会にでも出席するのかもしれない人も居るようである。

放射線医学に関係しているとその幅の広さはあらゆる手段 (Methodology) と全身の臓器の学会にも関係することが必然となり、その上、癌などの疾患にも及ぶと2桁の学会に会員となり、その会費および夫々の学会に演題を出したり、座長になったり、出席するだけでも大変なことになる。どうしても出席しなければならない学会にだけ限っても、年間何回も全国を駆け巡ることになる。まして国際学会に出席することになれば、最低1週間か10日間本拠地を離れざるを得ない。2週間は長すぎるので、外国でさえトンボ返りの学会の出席になることが多い。

今回は盛岡市で開かれた第20回断層映像研究会に出席していた処、懇親会の席上で健康文化振興財団林文子理事長に「前からの約束お願いしますよ」と言われ、とにかく、健康文化に関して何か書かなければならないことを remind され、学会の最後まで出席して、その帰りの新幹線の中でこの文章を書いている次第である。元々文才はないし、科学論文とはひと味異なる文化的な文章を書くことは苦手なので、林先生に頼まれれば「はい」と云ってしまった以上、思いつくままに雑文を書いていることをお許し願いたい。

日本は豊かになったから外国を援助しなければならないと、いつも外国からお金のおねだりを受けている様な処がある。しかし、国立大学研究施設を見ると、我々の新設医大でも十数年経つと診療用の設備でさえ老朽化して来て、いつ故障して止まってしまうかも知れないと冷や冷やしながら毎日の診療に従事し、人手不足や研究費不足で研究には仲々手が廻らないのが現実である。しかし、大学の存在意義は学問であり、教育、研究は怠る訳にはいかない。

学会に出席するのも、毎日自分たちのやっていることが日本の平均以上、世界のレベルに維持されていることを確認するためでもある。いつも世界のトップレベルに up-to-date になっているのは当然のこととして、自転車操業的であ

っても頑張っているのである。

健康文化に関して本誌創刊号に一文を書かせてもらい、総論的にはその流れは書いたのであるが、現在直面している健康文化は、何と云っても余裕がなければ文化は発祥しないと云うのが実感である。

学会でも、全国大会では日本全国の第一線の学者と交わることが出来るし、国際会議では世界中の人と意見交換が出来る本当に良いチャンスである。同じ研究をやっている人や同じ考え方の人と友人になることもでき、そして、訪れた土地の人との交わりも重要である。学問上の成果の発表は昼間の学会であり、学会前後や夜の懇親会など、文化的な側面が大きい。健康に関する学問的な意見交換に、文化的な人類共通の幅広い問題に対し、自分が常日頃考えていることをお酒の力も借りながら激論したり、心の奥底をさらけ出して話し合うのは誠に楽しいものである。学会に出席する重要性はこの健康文化の振興が第一だといつも感ずる次第である。

今回の学会の帰りは新幹線で仙台に停車するのみで、丁度、福島を通過する処であるが、恩師高橋信次先生の眠って居られる二本松の近くだなあと感激が蘇った。高橋先生の学会に対するお考えは、東京で催された国際放射線学会（ICR）の副会長をされていた時、その学会の発表内容の記録が残されなかったことに非常に不満をお持ちであった様に感ぜられた。正確な記録は論文に残すべきだとしても、学会で公に発表されたことは、**priority** のことも考えれば、**proceeding** が出るのが当然と思われたのであろう。現在も地方会と云えどもその抄録が学会誌に記録される以上、ゆるがせに出来ない精神は高橋スクールには残っていると思う。

記録が残らなければ単なるお祭りに過ぎないとも申された。しかし、学会の文化的な側面は世界中の人が驚く程であった。東京でのICRはニューオータニを借り切ったの1週間の学会で、日本人の2倍の外国人を交え、総出席会員1万人以上、当時の皇太子の臨席を仰ぎ、塚本憲甫会長の下に非常に楽しい学会であった。日本語を喋ることも殆どなく、外国へ行っている様な気分であったことを思い出す。日本文化のデモンストレーションも十分提供された。西欧の技術的な文明が日本人に消化され、東洋での初の学会で東洋的な文化と溶け合って、健康に貢献する放射線医学の健康文化の華が開花した様であった。

今から30年も昔の話であるが、1年間UCLAに留学したあと、ローマで催された国際神経放射線シンポジウムに出席した時の思い出は永久に体にしみついている。「郷に入ったら郷に従え」の諺のごとく、昼間の学会の途中に昼寝の時間があるのである。その時ローマ人に従って寝ていないと、学会長の招宴

は夜の10時から夜中の1時まで続き、その国の文化に接することができなくなってしまう。

今年は4月にチューリッヒで催されたヨーロッパの磁気共鳴医学会（ESMRMB）に出席した。米国と日本の3極時代ではあるが、米国のSMRMの直後であったため、日本からは私一人しか出席がなく、ついでにフライブルクのWENZ教授の誕生日記念の催しにも出席する機会を得たが、日本語を全く喋らない8日間をすごした。

6月にはフィンランドのタンペレで催された医療画像情報保管学会PACSの会議に出席し、帰りにヘルシンキからストックホルムまで国際法上公海の船旅を楽しむ機会があった。ストックホルムでは社会主義の国における医療福祉の実態を知り、又、生活の中における文化活動の何たるかを実感できた。具体的には健康文化とは他人に迷惑をかけないで自己主張しながら健康にめぐまれ生きていることである様に思われた。

今回の学会の直前には熊本における日本磁気共鳴医学会（JMRM）に出席した。現在はまさに学会シーズンの真只中にあり、明日から大学での仕事を片付け、週末には中部地方会で津を訪れ、来週の前半には京都でバット・キアリ症候群の国際会議に出席し、中国との国際交流研究の成果を発表することになっている。

中部地方会に出席した時に林先生にお会いして、この文章が健康文化の一端として認めていただけるか心許ないのであるが、何とか自転車操業に免じてお許しを願う次第である。健康文化の発展のため、もっと日本人全体が健康で自由なゆとりを持った文化が欲しいと思っているところである。

(1991.10.1)

(浜松医科大学教授放射線医学教室)